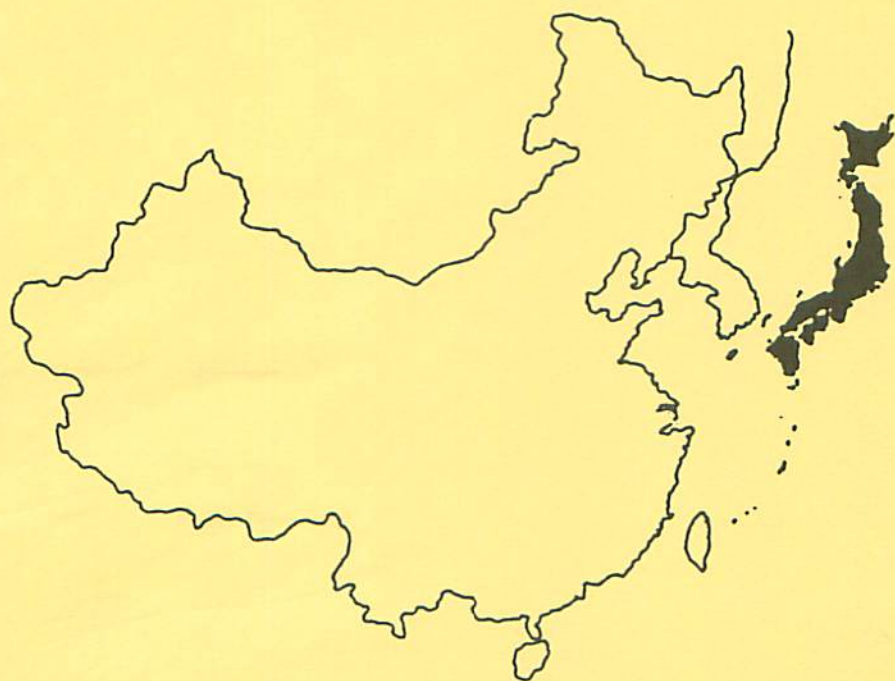


日本ビジネス中国語学会

会 報

第11号

【伊地智善継先生追悼特集号】



伊地智善繼先生略歴

大正 8 年 3 月 2 日 大阪市玉造で父伊地智由太郎、母ひさをの長男として出生。

昭和 1 1 年 3 月 大阪府立生野中学校卒業

同 1 4 年 3 月 大阪外国語学校（現大阪外国語大学）中国語部卒業

同 4 月 株式会社兼松商店（現兼松江商）入社、天津駐在

同 1 6 年 4 月 京都帝国大学文学部選科入学

同 1 1 月 大阪外国語学校助教授

同 2 4 年 4 月 大阪外国語大学助教授

同 3 8 年 1 月 フルブライト交換教授としてアメリカ合衆国に赴く。

同 4 0 年 1 0 月 大阪外国語大学教授

同 4 2 年 9 月 大阪外国語大学学生部長、学園紛争解決に尽力。

同 5 2 年 3 月 大阪外国語大学学長、学舎移転に尽力。

同 5 6 年 2 月 同 2 期任期満了につき規定により定年退官。

同 4 月 関西大学文学部教授、また大阪中国語学院長。

同 5 7 年 1 0 月 日本中国語学会理事長

同 6 2 年 4 月 流通科学大学副学長

平成 2 年 1 2 月 ビジネス中国語学会創設

同 5 年 4 月 勳二等旭日重光章を受ける。

同 1 2 年 1 2 月 中国政府教育部より日本における中国語教育に貢献した
功績により第一回中国語文化友誼賞を贈られる。

同 1 3 年 4 月 1 3 日 午前 1 1 時、心不全により永眠。享年 8 2 歳

伊地智先生への弔辞

2001 年 4 月 15 日

日本ビジネス中国語学会

会長 藤本 恒

伊地智先生。

伊地智先生は本当に突然お亡くなりになりました。私たちにとっては実に晴天の霹靂としか表現しようのない、悲しい出来事です。

何故かという、理由の説明が少々長くなりますが、昨日の朝日新聞朝刊の訃報欄にも書かれていましたように、伊地智先生は昨年 12 月に中国政府から「中国語文化友誼賞」を授与されました。

この受賞を我々「日本ビジネス中国語学会」の関西在住の主だったメンバーでこじんまりと祝うことにし、一人暮らしの先生のことだから、小人数で賑やかに顔を突き合わせて先生を囲む昼食会をするのが一番だろうと一月早々に先生のご都合のよい日を伺ったところ、大勢でのお祝い行事が目白押しで、これらが終わり落ち着くのは 3 月に入ってからになるだろうとのご意向もありましたので、それではその頃にしようと言うことで日にちを去る 3 月 17 日と設定いたしました。

ところが、2 月に入ってからちょっと体調をくずされ近所の病院に入院されたとのお話しでした。ただ、我々はこれはあくまでもご高齢でもあり一人暮らしでは何かとご不便なため保養・用心のための入院で決してそれほど重大なこととは考えもしなかったからです。会合予定の 3 月 17 日はそのため会合の直前に急遽取りやめましたが、少し暖かくなって四月に入ったので、そろそろ先生のご都合をお伺いし日時を決めようと考えていた矢先のことであったからです。

伊地智先生、先生は我々「日本ビジネス中国語学会」の生みの親であります。昨年 6 月、学会設立後の第十周年を区切りとして会長

の職責を退かれ「名誉会長」になられましたが、私達にとっては今も尚会長であるという心の中の気持ちは変わっておりません。

私事になり恐縮ですが、私は神戸市立の神戸市外事専門学校の出身でありまして学生時代に、早くから伊地智先生のご高名は伺ってはおりましたが、残念ながら伊地智先生に学生として教室でお教えを受けたことがありませんでした。

確か、1989年でしたが、東方書店から中国語講座のシリーズ本を伊地智先生の監修で出版しましたが、それがきっかけで伊地智先生の提唱によりまして1990年にこの我々の「日本ビジネス中国語学会」が誕生しました。お伺いしたところでは、先生はお若いときに商社勤めで中国天津に勤務されたことがあるとかで、対中貿易の実務にも誠に詳しく、またその時の実地体験からビジネス中国語・実用中国語についての思い入れは人一倍深く強いものがあったように思います。

先生が書かれた学会の設立趣意書には以下の下りがあります。

明治以来終戦時に至るまでの間、わが国の外国語教育は、先進文化を吸収するための文化語学と、近隣諸国との軍事・通商に備えるための実用語学にはっきりと分れていました。従って文化語学はアカデミックな研究であり、実用語学は技術的訓練にしかすぎないと見られてきました。そういう潮流の中で、中国語学界のエリートたちは、中国語学を文化語学としてアカデミックな研究の対象にしようと、第2次大戦末期に力説されるようになりました。

第2次大戦後は、曲がりなりにも中国語学はアカデミズムの片隅にその位置を見つけ、大学の教員もアカデミックな研究によつて自分の業績を作るようになりました。しかし、一方で実用語学としての中国語学は軽視されるに到りました。外国語大学や社会科学系学部でも、商業経済や新聞雑誌に関する中国語研究は次第におろそかになり、そのため、この方面の研究に従事する人々は、共同に研究する基盤もなく業績を発表する媒体もないという有様であります。

言うまでもなく、日本のおかれている国際的地位は明治・大正と大いに異り、外国文化に関する見方も先進・落後という単純な区別はなくなり、わが国と中国との関係もまた文化から経済まで広くかつ深いものになっています。中国語の言語理論

的研究はもちろんより一層発展させる必要があります。同時に中国語の実用的研究はそれ以上必要であると思われます。（以下省略）

この趣旨から、またご自身の実務体験から、具体的には私のような、学問としての研究業績のない、しかも自分の門下生でもない人間を、日中貿易の実務で中国語を使いつづけていたという理由で目をかけて頂きました。同様に先生の広いお気持ちと中国語の実用的研究に役立てようという真っ直ぐなお気持ちから引き立てて頂いたものが私の知る限りでも五指に余ります。

先生のご指導の宜しきを得て、我々は過去満十年間の活動を継続してまいりました。一例を申し上げますと、学会会則を作った時、学会活動の一環として先生の特別なご指示により付け加えました「ビジネス中国語検定を行う。」という一項があります。この「ビジネス中国語検定試験」は、当初学会単独で行っておりましたが、その後伊地智先生が当時の大阪商工会議所のトップに対し、積極的熱心に働きかけてくださった結果「大阪商工会議所」との共催事業で行うようになりました。また、その成果の一つとして、「ビジネス中国語検定試験・試験問題と解答・解説集」なる出版物も学会・大阪商工会議所の連名で出版できました。

先生のご指導を得て、我々がこの十年間に行った多くの作業の中のごくごく一部分を思い出し、ご披露しましたが、我々がこれまでの活動ができたのは先生のご教示があったからでありますし、またその分け隔てのない広いお心、孜孜としてうまず弛まないご指導と精力的な実行力があったからこそ出来たことであります。

茲に、先生とお別れすることになりましたが、私たちは決して先生のお教えを忘れることはありません。どうぞ、何時までも何時までも私達とともに、私達の中に生きていてください。

以上謹んで弔辞と致します。

伊地智先生を偲んで

摂南大学 武吉次朗

伊地智先生に初めてお目にかかったのは1983年秋、日中友好協会主催の中国語弁論大会で審査員を勤めたときだった。当時私が身をおいていた日中貿易業界には大阪外大出身者が多いので、ご高名はかねがね伺っていたが、何ときさくな方か、というのが第一印象だった。その6年後、門下生でもない私を摂南大学の専任教員に推薦していただき、90年4月から勤務するようになったが、2か月ほど経ったとき、わざわざ勤務先まで訪ねて来られ、私が新しい環境になじめたか確認しながら助言をいただいたのには恐縮してしまった。「他人の世話をする」ことのお手本を行動で示された思いだった。

それからちょくちょくご自宅を訪ねたり、ビジネス中国語学会の会合の後、食事をしながら歓談したりする機会に恵まれた。先生の該博な知識はいうまでもないが、いつも感服にたえなかったのは、現代中国の民情にも通暁しておられることだった。一度、「どこでお知りになったのですか」と不躰な質問をしたところ、「こんなものも読んでいるのですよ」とバッグから取り出されたのが、北京出版の『半月談』という雑誌だった。庶民の暮らしに生きる言葉、それを通しての地域研究、いわゆる学究肌とは異なる先生の姿勢の一端にふれた思いがした。

先生から時どき電話をいただいたが、たいてい中国語の意味や例文についての解釈の確認だった。元大阪外大客員教授の史有為先生も人民日報海外版への寄稿文で、「お宅へ伺ったとき、初対面の挨拶もそこそこに、この単語の意味を教えてほしい、と切り出され、何ら偉ぶるところのない謙虚な人柄に打たれた」と書いている。

奥様に先立たれたことが、先生にとり心身両面でたいへんな打撃になったのは、われわれの想像を超えるものだったろう。こと一人暮らしという点に限っては、単身赴任の私の方が盗謾y狼ねので、よく「果物は朝食のとき召し上がるのが一番ですよ」とか「冷凍食品にこんなものもありますよ」などとお節介めいたことを申し上げたが、返ってくるのは生返事ばかり。ああ、先生の頭は編纂中の辞書のことでいっぱいなのだな、ここまで打ち込まれているのか、とほとほと感じ入った。

来春刊行予定のこの辞書は、格式を保ちながらも、庶民の息遣いが伝わってくるような解説が散りばめられており、先生の面目躍如たるものがある。この事業のお手伝いに加われたことは、私にとり誇りであり、忘れられない思い出となろう。

伊地智先生、有り難うございました。伊地智先生、さようなら。

伊地智善継先生を悼む

伊地智先生は中国語学界の重鎮でしたが、私にとっては優しい父親のような存在でした。先生と初めてお会いしたのは、先生が大阪外大から関大に移られた年でした。中国の教育視察団が日本を訪れ、私はその通訳を依頼されました。懇談会が始まろうとした時に、ベレー帽を被った年配の方が私の傍にお座りになり、「伊地智です。」と会釈をされました。情報が閉ざされた中国に長年住んできた私は、流暢な中国語を操るその紳士が、そんなに偉いお方だとは知りませんでした。その時以来、先生は次々と「お手伝いをしてください。」とおっしゃっては、私に仕事と勉強のチャンスを与えて下さいました。私が辞書編集の仲間入りをするようになったのも、その一つです。

私が流通科学大学で専任になれたのも勿論先生のお蔭ですが、「おばあさんになった時に、孫に小遣いがあげられる身分というのはいいもんですよ。」と意味深長におっしゃって、実は先生のお母様も、ずっと教職に就いておられたというお話を聞かせて下さいました。

大学での先生の研究室は私の筋向いにありました。授業が終わると必ず私の部屋に立ち寄って雑談をされるのが常でした。「あなたのところに来ると、いつもお茶とお菓子が用意されているから嬉しい。」とおっしゃって、ほっとされるご様子でした。そして一服すると新語発見の談義が始まるのでした。公務のお忙しい中、いつそんな時間があるのかと思われるほど、多くの書物に目を通され、よく記憶しておられました。私にとっては、マン・ツー・マンの授業を受けるような貴重な時間でした。先生の宜興焼きの湯呑はいつも私の手許に置いてあり、定年退職された折にも「またお茶をよばれに来るから」とおっしゃって、置いていかれました。それが今や先生の形見になろうとは……。

研究室での「お茶」ができなくなってから、先生との交流は電話に取って代わりました。先生は朝5時に起きて辞書の原稿をご覧になり、ひと仕事終えたところで私に電話をくださるのでした。中国語の事、辞書の事、外国語センターの事、日中教育交流懇話会の事、多岐にわたって私を教え導いて下さいました。先生が「中国語言文化友誼賞」を受賞された時は、「長生きしてよかった。」とたいそうお喜びでした。

私が最後にお会いしたのは、待場先生と一緒にお見舞いに伺った時でした。たまたま病院からご自宅に戻っておられ、私達は先生のお嬢さんと「10分だけ」という約束でお会いしました。日頃と変わらぬ口調で淡々とお話になり、「休閒」という言葉が「カジュアル」という意味で用いられていることに話が及びました。先生がお疲れになるといけないので、私達は敢えてその話題に触れず、いとまを告げました。先生はまだまだ話を続けたいご様子でしたのに……。

私はこの夏中国に行き、北京の街角で“休閒食品”“休閒点心”という文字を発見しました。帰国したらさっそく先生の前で自慢しようと思った瞬間、悲しい現実に戻り、バスの中で溢れる涙をこらえることができませんでした。

(2001. 8. 30)

流通科学大学 能勢良子

30年間日中貿易促進のため働き、多小は役立ったという満足感もあり、1994年に日中貿易センターを退職しました。この話しを耳にされた先生から、関西外国語大学で第二外国語としてではあるが中国語を教えるように、と薦められました。

関西外国語大学の谷本学長については、先生が力を入れられ活動している「日中教育研究会」の報告書を偶然の機会に目にして、とても感激した事がありました。それは谷本先生が日中教育研究会の訪中団団長として中国を訪問された際の感想文で、「中国各地を訪問している際、中国侵略戦争について一日本人として、いつかは中国の人々に謝るべきだと考え、ずっと心に重くのしかかっていた、北京での表敬訪問時に“謝罪”され、時ならぬ大拍手が沸き起こり、“教育者としてはっきり話して良かった”と思った」という文章でした。日本でははっきり述べられる方が少ないので、私は大変感激した事を今でも思い出します。

折りしもこの日中教育研究者訪日団が関西外国語大学を訪問されるので、通訳を手伝うようにと先生よりお話しがあり、私は喜んでお手伝いすることになりました。

当日は短い時間で多くの紹介をする必要があるとのことで、私はいつもの調子で「同時通訳」を致しました。例えば学長先生が学校案内を手に「では8ページ」と話されると、私はその様子から「請翻開第八頁」と翻訳し、「を開いて下さい」と言わないうちに、中国の団員達がページをめくったので、学長先生方はびっくりされたと後日伺いました。それもあり、関西外大で教鞭を取れるようになりました。初日学長にお会いした際「中国語」というより、むしろ「中国語を教えて下さい」と言われた時は喜びのあまり、「私の最も望む所です」と申し上げてしまいました。でも大変不安でした。「先生、日本人が一から中国語を学ぶ際、何が解らないかが、私には解らないのですが」と申し上げました。自分が中国語を話したり翻訳する事と、人に教えるという事とは全く違うのでは?と不安でした。先生は「日本の中国語教育についての総括」を色々話され、殊に戦前・戦中の中国語教育は「通弁」つまり戦争のための通訳養成になっていた事の反省から、戦後の中国語教育はあまりにも「アカデミック」を追い求めすぎ、実技である語学力の教育が疎かになり、特に中国の外国語教育と比較して、日本の外大出はまともに外国語が話せない結果になっている」「これからの日本には中国の人々と充分コミュニケーションが取れる人材が必要、日本からどんどん発信し、日本を理解してもらわなければならない」と強調されました。そして、例え「第二外国語」としての中国語でも「やり方次第で物になるよ」と力説されました。

外大の中国語履修者が毎年2000名もおり、全員が中国語を物にする訳ではありませんが、確かにしっかり物にする学生もでており、殊に学習を通じて中国に関心を持ったり、留学して深める学生も続出し、何よりも「日中間の歴史問題に真剣に取り組む」学生が増えている事が私の最大の喜びです。先生が生涯を中国語教育に賭けられたように、先生の遺志を継いで、私も語学教育を通して一人でも多くの日中友好に賭ける若者を養成すべく、この仕事を続ける決意です。

伊地智先生を偲んで

流通科学大学 待場 裕子

思えば1955年4月、大阪外国語大学中国語学科に入学した時点から、私は幸運にも伊地智先生の教え子としての人生を歩み始めることになりました。先生には申し訳けないことながら、私は決して優秀な弟子ではありませんでした。にもかかわらず、4年間の在学中はもとより、卒業後も先生は折々に的確な指導をしてくださり、中国語と深くかかわる私の人生を導いて下さいました。先生が亡くなられた今日、あらためてそのご恩に深い感謝の念が沸いてまいります。

私が大阪外大を受験したのは、この大学が、当時中国からの帰国子女として見つけ出した唯一中国語で受験が出来る大学であったからです。しかし中国語の入学試験の感触がどうであったか、全然記憶にありません。ただ数学（解析Ⅰ）の受験中、残り時間がわずかになった時、ふと問題冊子に未解答の1ページが残っていることに気付き、顔面蒼白になった記憶が、未だに鮮烈に思い起こされます。たぶん数学の出来はよくなかったはずですが、それでも無事入学できたのは、やはり中国で高校2年まで学んだ帰国子女として、ある程度の中国語の力があつたからかもしれません。

その時以来、ずっと中国と中国語の世界に暮らし続けた私は、先生にまさに「ご指導とご鞭撻」を頂きつづけました。それにしても、先生の期待に充分応えることが出来なかった自分の不甲斐なさ、努力不足が悔やまれてなりません。

1988年神戸に流通科学大学が創設され、先生が副学長として赴任された時、私をこの大学の中国語担当教員の一人として起用していただきました。実学の精神を趣旨とする流通科学大学は、国際的にも、社会的にも開かれた大学を目指し、先生の陣頭指揮もあって、外国語教育にかなりの力が注がれました。語学の授業に中国語専修コースを設け、いち早く海外語学研修を始めたのも、先生のご指導あつてのことです。

1990年、先生の呼びかけで「ビジネス中国語学会」が日中間のビジネス分野で活躍されてきた実力をもった先生がたを中心に組織され、今日まで、地味ながら営々と活動を続けております。また昨年（2000年）3月先生がおそらく長く心に懸けてこられた大阪外大の中国語学科の卒業生と在校生を縦につなぐ同窓会「鵬翼会」も創設されました。いま思えば先生はまるで全てを悟られていたかのように、着々と後進のために道を敷かれておられた感じがします。

唯一悔やまれるのが、先生の生涯の偉業となるべき中国語辞典の出版が、ご存命中に日の目を見なかったことです。これからこの辞典の校正など最後の作業に携わる者として、これに渾身の力をささげること、そしてこれまでの先生の数々の教えを思い起こしつつ、今後の仕事の指針としてゆきたいと思っております。

ご冥福をお祈り申し上げます。

2001年7月

汲めども尽きぬ興味を：在りし日のお姿に情熱と恩愛を偲んで

鮫島 敬治（大阪外大C4期）

黒板の中央上部にまず「買」と大書し、その下に「不」と書いたあと、こんどはさらにその下にいくつかの漢字を横に書き並べる。そこでたちまち、3字セットの言葉が数多く目の前に現れた。買不上、買不起、買不到、買不了、買不尽、まだまだほかに、買不着、買不住、買不尽……。たちどころに十数個の言葉が並んだ。



大阪外国語学校は第2次大戦中に大阪外事専門学校と改称、東京大空襲と相前後した1945年（昭和20年）3月13日の大阪大空襲で焼け落ち、敗戦後の翌46年早春から高槻の旧陸軍第4工兵連隊の隊舎で授業を再開、ここで49年春に新制大阪外国語大学に転生する。天王寺区上本町の大阪キャンパス再建に伴い、57年には全学大阪帰還を果たすが、それ以前の52年（昭和27年）に後期2年は大阪に戻った。したがって52年春に入学した新制4期生は、学生数が半減した高槻学舎で前期2年を過ごしたあと、大阪学舎での後期を終えて56年に卒業するまで、ゆったりとした学習空間をエンジョイした。

もっとも中国語科には、上海・北京・大連・瀋陽・長春などの中国大陆や台湾、朝鮮半島などからの引揚者がいて、大連一中での学友と一緒にになったのには驚いた。ロシア語と中国語をやっていた父が引揚げ後すっかり健康を害して病床に伏したので、私は高校を途中から定時制に移り、外大でももっぱらアルバイトに励んでいた。ときたま教室に顔を出しては、授業の進み具合に安心して週に1回か精々2回ほど登校する状況だった。

私が比較的まじめに通学するようになったのは、一つには、2年生後半から大連以来の級友と夕方から週3回ずつ交代の珠算学校教師稼業を見つけ、さらに住田先生が育英資金の特別増額措置を配慮して下さったお蔭で、一般の大卒初任給以上の収入で生活が安定したこと。これは有り難かった。そしてもう一つは、伊地智先生の理詰めでメリハリの効く授業から刺激を受け、汲めども尽きぬ興味を覚え始めたこと。面白くなったのである。

伊地智助教授は、日本語の「てにをは」でもおろそかにせず、いい加減な応答には容赦しない厳しさを見せた半面、ときに「言葉の知的遊戯」を面白おかしく繰り広げて、楽しませてくれた。「ただ単に通ずればよい、と言うものじゃない。喜怒哀楽や、微妙で重大な含み、変身への謎かけ……など、人々の心のヒダが表意文字の組み合わせには込められている。同文同種などと甘く見て、心の底が読めぬから、あんな戦争をした」。



黒板に伊地智先生が「買不〇」を書き並べ、いたずらっぽい表情で「違いが、分かるかな」と問いかけたのは、53年初夏のころ、高槻2年目の授業だった。「この中には私の勝手な創作も入れているが、多くはまともな中国語である。それぞれに買えない／買わない理由が明らかになっていて、単なる拒否とか否定ではない」。先生の挑発には乗るまいと誰もが沈黙しぱし。そこで始まったのが、辞書やガリ版刷り教科書にはない話で、文字にひそむ世々代々の人々の知恵、人心の機微と漢字の字義の組み合わせが織りなす談義。

のちに論説委員会に属したころ、東京外大で中国経済論などの非常勤講師を務めた際、私はよく「外国語を習って、それをツールに何かを学ぶ」のだから、「手段と目的を区別」して「まず手段をしっかり身につけること。そして架け橋役として日本語と日本事情に通じておくこと」を強調しつつ、年に数回の中国出張のみやげ話もしていた。その後、再度の大阪在勤に先生からビジネス中国語学会創設についてのご相談を受け、作るのならあくまでも全国組織としての発足をと強く思い起こす。

単なる言葉の置き換えではなく、経済社会文化の仕組みや価値観の位相を踏まえての外国語学習を——という先生の宿願は、近く刊行される日中辞典を通じて次の世代に必ず引き継がれていきます。

ご安心下さい。長年のご教導にあらためて感謝しつつ 合掌

（日本経済新聞初代北京特派員、論説副主幹、大坂／東京編集局長、専務国際担当などを経て、現在日本経済研究センター客員研究委員。この間に日本記者クラブ理事長を兼務）

伊地智先生の怒ったところを見たことがない

あれは、日中平和友好条約が締結された1978年の5月。私は、今の日中経済貿易センターで働いていたが、当時大阪外大学長の金子二郎先生から、大学教員への話を聞いた。

府知事の選挙に関わっていた先生は、私を伊知智先生に渡された。大河内、辻本の両先生から中国語と音韻の授業に出ることが許された（因みに商業中国語は、担当者から許可されず）。研究生として、谷町の外大と大阪大学での聴講は、得難い勉強の機会だった。

79年4月から、芝田 稔先生の推薦と支持により、関西大学で非常勤講師として教育と研究に従事するようになり、伊知智先生とも一緒に担当する機会があった（松野先生の紹介で立命館で4年間非常勤）。84年、縁あって徳山大学に赴任することが決まった。最後の授業の後、校庭で先生は、山口へ行って10年間は頑張rinaさい、とおっしゃられた。有り難く、お話を伺い、徳山では、毎日楽しく、有意義に学生達と学び、遊んだ。

二三年経ったある日、先生は電話をかけてこられ、姫路に外国語学部中国語学科のある大学ができる、どうだ来てやらないか、とのことだった。2回目の家の新築をして、毎週テニスで汗をかき、優雅に過ごしていた。だがやはり、中国語の専門の学生達と4年間過ごせるのは魅力だ、と思った。先生は、後日わざわざ徳山まで来られ、正式に招いて下さった。そして開学2年目の1988年から、現在の職場に勤務することにした。

近年は、日中教育交流懇話会と日本ビジネス中国語学会、高校の中国語教育そして姫路独協大学の中国語教育について、多大の教えを頂いた。また周而復『長城万里図』全六巻刊行会の発起人にも、快くお名前を貸して頂き、非常に感謝しています。お宅に伺ったのは、北京大学の陸陰明先生をお連れしたのが最後で、今年2月大阪日中の講演と祝賀会でのご挨拶をお聴きしたのが、最後でした。多くの貴重なご指導を頂きながら、何のお手伝いもできないままにお別れすることになったのが、残念です。南の沖ノエラブに伊知地の姓があるが、種子島に親戚がおられる、とのお話しも伺い、一層親しみを覚えた次第です。

伊地智善継先生のご冥福を、朝夕お祈りしています。

伊井健一郎 2001年6月16日

「辞書は残る」

…………… 杉村博文

生涯の大半を中国語教育の普及と向上に捧げられた伊地智先生が、その集大成として選ばれたのが中日辞典の編集であった。

あるとき、辞書の仕事で枚方にお邪魔し、雑談のついでに、なぜ辞書を編む気になられたのですかと、お聞きしたことがある。それに対し、先生は淡々とした口調で、

「論文は残らないけれど、辞書は残るでしょう」

と答えられた。（今ひとつ記憶が定かではないが）その日は話し相手が私一人であったせいかもしれない、先生にしては珍しく「我」を出された答えで、私は一瞬虚を衝かれた。私にしても、なぜ改めて先生に辞書を編む動機を尋ねる気になったのか、なにか引き金があったはずであるが、思い出せない。特に論文を書くことを意識した話をしていたとも思えない。

現在出されている辞書の不備や、先生が理想とする辞書のイメージが語られるであろうという予測の虚を衝かれたのではない。では、自分の弟子の多くが論文で飯を食っているにもかかわらず、淡々と「論文は残らない」と断定されたことが虚を衝かれた内実であろうか。確かにそれも少しはあった。わずかな反発も感じた。しかしなによりも、「辞書は残る」という先生の言葉を、正しい理解であったか否かはともかく、先生が「我」を出されたと受け取ったことが大きい。

「残る」は、有用な工具書として長く学習者の役に立ち続けるという意味で理解できるし、先生の本意もそこに在った可能性が大きい。しかし私は、先生が、ご自分の生きた証を残したいと仰っているように受け取ったのである。この公と私のねじれ、これが（自分勝手に）私が虚を衝かれたことの内実である。

辞書の中で先生は強烈な自己主張をされている。それは「我」ではない。それは、学者がそのようであるべきだと信じて行う行為であって、むしろ良心と呼ぶべきものである。よい製品は、あくまで汎用性を追求するか（辞書に関して言えば、同時に高い規範性を実現する）、制作者がとにかく自分の欲しいものを作るか、そのいずれかによって生まれることが多いと言われる。前者は「紙」や「鉛筆」をイメージすればよく、後者はSONY製品のイメージである。中国語の辞書で言えば、『現代漢語詞典』が前者の代表である。徹底的に汎用性と規範性という思想で貫かれている。『伊地智中国語辞典』は後者である。こちらは徹底的に伊地智哲学で貫かれている。伊地智先生ご自身が欲しい辞書である。そして、伊地智先生の知識そのものである。

『伊地智中国語辞典』は中国語辞典であると同時に、伊地智先生である。われわれにとって、かけがえのない存在として、先生の思い出とともにいつまでも生き続けるであろう。

（於北京大学朗潤園北招待所，九月二日）

伊地智善継先生

伊地智中国学

中国語で「依老売老」とは周囲が老人をたてるのをよいことに尊大にかまえている老人をいうのだが、伊地智先生にはまったくその気配がない。むしろひょうきんともいえるべき腰の軽い老人である。話が中国にかかわるかぎり、電話がかかればどこにでも気軽に出かけていく。その先生を支えているのはいつまでも衰えぬ旺盛な中国への好奇心である。先年、「主人より一日後に死にたい」とつねづね先生の生活の無能ぶりを心配されていた夫人をなくされたが、その心配をよそに、80を越えた今も、毎日ライフワークである中国語辞典の原稿に向かわれている。この辞典は先生の学問を反映してユニークなものだが、まもなく中国語中辞典として刊行される。

先生が中国語に情熱をかたむけるのは、そのなかに「中国の社会を支配する原理がひそむ」と考えるからである。単に「ことば」ではない。まして「日常の用を足す手段」ではない。中国はなんともわれわれの想像もつかないことが起こる世界だが、これを理解するにはそこに住む人々の心の底に潜む生の原理を知らねばならない。それはかれらの言葉、言葉のあり方を調べることによってわかる。言葉がかれらの生き方を知る原資料だ、というのが先生の考えである。「中国には今も公務員法はありません。最近巡察員、調研員という役職ができていますが、どんな仕事をしているか知っていますか。多くの役人はどんなふう採用されているのか、“買路錢”（直訳すると道を買う金）ということばがありますがそれがどんなものか、君、知ってますか。こういうことを知らなくては中国を対象とする社会学も法律学も成立しないのです。中国の統計にはいつもなにがしかの誇張があります。“水分”とよばれていますが、これがどこで生ずるのか、またそれが時に応じてどの程度になるか、知っていますか。それを正確に読めなくては中国の経済分析は意味をもたないのです。社会学や法律学、経済学といった西洋の学問をそのままもちこんで分析してみても、それで中国の出来事に納得のいく説明をあたえることはできません。中国を見るには特別なメガネが必要です。

メガネをかけて矯正すれば、すべての出来事がなんの不思議もなく起こっていることがわかります。中国の原理が整然とそれらを一貫しているからです。」

先生はメガネは言葉のなかにひそんでいると考える。中国人の生き方の根底を理解しなければ、中国のどんな些細なニュースも本当の意味はわかっていないのである。

先生はいつもポケットに本を持ち歩く。それは専門書ではない。日本でいえば週刊誌、中国の大衆誌である。村の出来事や庶民の投書が多い。もっともそれも中国の雑誌だからそれなりの検閲を経ているのだが、先生はその行間に今も中国の原理が健在であることを確認する。

「北京の大学の学費は今4800元。これは学業成績に応じて変わります。手間のかかる学生は付加経費がかさむという論理です。日本で私学など入試に際して内密におこなわれることが堂々とまかり通るのです。日本の建前主義が、実は、裏でつじつまを合わせているのどちらが合理的か。最近、中国のある受験生は大学の合格通知が出身高校から来たといいますが、そして一人あたり200元の謝礼を求められたといえます。日本では考えられない話でしょう。しかし、わたしはかつて天津の商社に働いていたころ、警官が来て、巡回表を見せてメリケン粉1表を求められたことがあります。わたしはそれが5元だと知っていたのでただちに5元を渡しました。後にコンプラドールにほめられましたが、これは警官が袖の下を要求したのではないのです。当時の警官の正当な要求です。なぜならかれらの給料は最初からこれを計算に入れて決められているからです。巡回表を見せたのは自分がこの地を担当する正規の警官であることを証明したのです。」

中国学とは中国を対象とする学問だからいうのではない。対象自身の中にそれを解明する学問の方法が用意されているからいうのである。清朝の中国語研究は近代言語学とは別の高い水準の学問を形成しているが、それにふさわしい方法論をかれらは自らあみだしたのである。中国を知るには中国そのもののなかに読み解く学問の方法がある。伊地智先生の学問は中国語を中心にすえた地域研究というべきだが、方法論をさきにたてないで、中国語を武器に、中国の特殊性にそくして問題の深みに分け入るいわば闊達な現代の中国学なのである。

文 学 少 年

伊地智先生は1919年3月2日、大阪市玉造に生まれた。

「伊地智というのは元来豊岡の出で、母方の姓です。母はひさをと言ひ、父由太郎はその婿養子です。門真村の出身で高橋と言いました。父は次男で高橋のあとはその兄が継ぎました。父ははじめメリヤスの会社に勤めていたようですが、後に大阪で商売をしていました。小道具屋と美術商の間といった感じの商売で、わたしはしばしばリヤカーに古い机などを積んで配達に行ったものです。当時、「日本一」の登り坂には車の押し屋がいて、小銭を出して押しもらったものです。兄弟は7人です。わたしは長男です。幼くして2人がなくなりましたが、残る5人はいまも健在です。男3人、女2人です。」すえの弟さんはフランス文学者伊地智均関西大学教授、妹さんのお一人は大原信一同志社大学名誉教授の夫人である。

「学校は、子供のころ鶴橋に住んでいたから、小学校は北鶴橋小学校へかよいました。中学は生野中学です。あまり勉強をした覚えはありませんが、小説をよく読んでいました。」

小学生のころ、愛読書は立川文庫の「猿飛佐助」や真田十勇士の講談本であった。中学校に入ると明治大正文学を読みあさった。先生は今も萩原朔太郎の詩集「月に吠える」を座右に置いている。これを読むとその時代をまざまざと思い出すという。「フランスに行きたしと思えど」は先生にとって「せめて中国に行きたし」だったのである。先生の知的原点のなにかを語っている。周囲に文学好きの少年は多かった。後に朝日新聞の学芸部から直木賞作家になった岡田誠三氏は中学の3年先輩、大阪外語でも先輩であった。

「岡田さんの家は心斎橋筋の大丸の向かいにありました。立派な呉服屋さんです。かれは朝学校にくと数学の中島先生が門のそばに立っていて、先生と握手をするとそれでどこかに行ってしまうのです。実はこれで出席あつかいです。そんな自由のなかでかれは本を読んでいた。外語では同級の小石不二夫君が受験雑誌「蛍雪時代」に小説を投稿して賞をもらっていました。」

先生が中学を出ると大阪外国語学校に進んだのもこの文学好きにでるものであった。当時

の大阪に文系の学校は大阪高等学校があったが、あまり受験勉強をしない文学少年が入れるのは大阪外語しかなかった。なにより大阪外語には入試に数学がなかった。

「生野中学には久保田早苗という漢文の先生がおられました。3年間担任をしていただきましたが、この先生がしばしば大阪外語には井上翠という偉い先生がいるとおっしゃっているのを聞きました。久保田先生は井上翠先生の末のご子息を教えられた関係で交友があったようです。また英語を習ったのは大阪外語の英語科出身の先生でした。わたしは労働が嫌いであつたわけではないのですが、新しい世界にあこがれました。」

かくして伊地智先生は1936年4月、大阪外国語学校中国語科に入学する。

「当時の外語は満州事変以後の時代の流れもあつて就職がよく、いろんな学生を集めていました。英語やフランス語には後に画家や作曲家になって活躍した人もいます。もちろん文学青年もたくさんいました。少しおくれますが司馬遼太郎さんもその一人です。中国語や蒙古語には大陸派がいました。アジアの新秩序や蒙古の独立などを論じていました。授業は井上先生がこの年退官され、主として吉野先生と関恩福先生になりました。暗記することが多くあまり興味がもてませんでした。当時のテキスト“急就篇”や“官話指南”から中国の文化の香りはあまり伝わってこないではありませんか。」

“急就篇”は戦前の中国語テキストの代表である。明治37年刊行以来終戦まで170版を重ねたというロングセラーである。戦後も改訂版が出ている。後に先生はこのテキストについて次のようにのべている。

「わたしは急就篇が伝達する思想にがまんがならなかった。具体的にいえばその思想は老人的であり、非科学的であり、実利的であり、立身出世的であり、ときには非人間的でさえあつた。…“北京人一天喫幾頓飯？”“喫兩頓。”“那省錢。”（北京の人は一日になんど食事をしますか。二度です。それは安上がりですね）と問答をし、その後、金持ちは米を食べ、貧乏人は麦をたべるという話題に発展していくのである。こういう中国語になんだかいやしさを感じた。」

初歩でこれを習って“官話指南”に進み、ついで時文を学ぶという当時の中国語学習コースは文学青年を満足させることはできなかった。幸いそのころ、金子二郎先生が赴任する。北京から帰ったばかりの若い金子先生は北京大学で胡適や陳独秀が起こした文学革命や国語運動の意味を理解し、日本の明治以来の教育が中国の現実、少なくとも中国の知識人の知性を反映するものでないこと感じ取っていた。そしていち早くその成果を中国語教育の現場にもちこんだひとりであった。金子先生のテキストは魯迅や周作人、胡適などの白話小説や評論、黎錦熙の白話文法であった。

このあたりの事情は、後の安藤彦太郎氏の分析に従えば次のようになる。

「ともあれ、中国の国語運動には学問的裏づけがあり、そしてなによりも強烈なナショナリズムを背景としていたから、これに注目すれば、当然、従前のような儒学的な旧世界のなかでの一体感や当時喧伝された同種同文的観点とはことなっており、中国の新しい文化の息吹を確認し、その成果を評価する立場にたたざるをえない。だが、一方で日本は戦争によってこの国語運動の成果を蹴散らし、ときには“焚書”の愚挙さえおこなった。日本の中国語ブームはまさにこの時期におこった。中国の国語運動に注目する人びとの心情は、微妙に屈折せざるをえない。…なかには相当に戦争賛美の言葉をつらねた人もいないではない。だがしかし、中国のナショナリズムにささえられた学問的成果を評価するという、その一点において新しい動向をつかみとっていたのであって、だからこそ戦争がおわったとき、倉石さんも、…竹内さんも、多少戦争に協力した向きも、革新思想の持ち主も、いっせいに同じスタートラインにつくことができた。」この分析は鋭い。この理解によってこそわれわれは戦前ないし戦中の中国語教育・研究と戦後のそれとの間の不透明な連続にいちおうの納得をえるのだが、金子先生の着手ははやかった。文学革命や国語運動の成果を中国語教育にとりいれたさきがけのひとりである。

「金子先生には2年になってから“狂人日記”“阿Q正伝”“周作人小品文”などを習った。現代文学作品を中国語の教材に使ったのはおそらくはじめてではなかろうか、と先生からお

聞きしたことがある。“急就篇”“官話談論新編”“今古奇観”などにやや物足りない思いをしていたわれわれには、魯迅や周作人に目をみはる思いであった。これらの現代中国の文学作品を十分理解できたわけではないが、自分たちのもっていた思想的関心と共通するなにかがあった。」

伊地智先生はこれらの教材が展開する新しい世界にあらためて中国への魅力を確認し、次第にそのなかに没頭していく。これが先生の学問のはじまりである。やがてこの流れのなかで倉石、金子の邂逅があり、その申し子としての先生が誕生する。

中国語のモルモット

1939年大阪外国語学校を卒業した伊地智先生は兼松商店に就職する。

「これは当時の林社長が葉山万次郎校長と大学同期で、だれか学生がいないかという話があったようです。」その推薦で入社した。「入社すると最初は大阪支店で電信をやっていましたが、すぐ天津支店の雑貨部門に配属され対米貿易をやりました。2年近く勤めました。しかし次第に戦局が進み、仕事にも生活にも自信がもてず、山本治君（蒙古語15回、後に鯖江の市長になりました）と“いつまでもこんなことをしていてもしょうがない”と語りあって退職しました。できればもう一度どこかの学校で文学とか哲学とかいったものを勉強したいと考えていました。もしそれができなければ家業をついでもしかたがないと思って会社をやめ、日本に帰りました。」

興味深いのは「もう一度どこかの学校で文学とか哲学とかいったものを勉強したいと考え」という部分である。先生の学問の岐路であったらしい。1940年の暮れのことである。しかし、現実には日本に帰った先生を待っていたのは：

「金子先生は当時の中国語学界の状況をいろいろ説明され、今後の中国語教育は言語理論にもとづいておこなわれなければならないし、それをやるのは若いものだとおおいに鼓舞された。当時、倉石、吉川先生は“改造”誌上新しいシノロジーの方法論を発表され、また魚

返先生も中国語にかんするヨーロッパ学者の意見を紹介されつつ、活発な議論をだされていた。」そんな状況のもとで倉石博士を訪れ、弟子入りすることになる。

「金子先生が、商社を退職してぶらぶらしている私を帯同して、京都の倉石先生のお宅を訪問されたのは昭和15年の暮れであった。金子先生は倉石先生と度々会って日本の中国および中国研究について論じあわれていたようである。」

倉石博士はこの間の経緯をもうすこし詳しく次のように述べている。

「わたくしは、現代作家としては、魯迅先生にお目にかかったのが因縁で、先生のものを読み、大学の教科書にもとりあげましたが、あとで謝冰心先生のものにぶつかり、ほんとに偶然ですが、たいへん清純な気持ちが出て、すっかり読みました。もっとも、謝冰心先生にお目にかかったのは、ずっとあと、戦後に先生が日本に来られるようになってからですが、このかたとは家族的な交際が今でもつづいております。ところで、わたしが“寄小読者”の翻訳を出しますとき、はじめにその一部分をとりだして小さなプリントをつくりました。そしてそれを知っているかたがたにおわけしまして、どこかでまとまった訳を出すことはできないだろうかという相談をもちかけたことがあります。その後その小さなプリントを、もちろんその方にさしあげたのではないんですけども、それをふつとご覧になってわざわざわたくしを訪ねてくださった方がある。それは大阪外国語大学の学長もされた金子二郎先生です。そのみならず、自分がこれから育てようと思っている弟子がある、それをあずけるからどうでもしてくださいといわれるのです。その弟子というのが今の大阪外国語大学教授の伊地智善継さんです。なぜこんなことをいうかといいますと、これは、わたしども東京大学、京都大学など、もとの帝国大学系統の学校と、外国語学校とが手を握るようになった最初の因縁だからです。さきほどから申しましたように、外国語学校の先生がつくられた本は利用していましたが、それはほんの教科書や字引として利用していたというだけで、本当にお互いが相談しあって、これからどうしようなどと考えるようになりましたのは、これが最初でした。」

かくして伊地智先生は、漢文と中国語が別の学問として研究されていた時代にそのはざまを埋める理想をになって倉石先生の指導を受けることになる。

「当時の倉石先生は体系的な中国語教育の基礎のうえに古典教育を行うというのが持論であって、いちおう体系的な中国語教育をうけたことになっているわたしは、先生のモルモットのうちの一匹になる光栄をえた」のである。これから約2年、先生は京都帝国大学文学部選科に学ぶ。

やがて大阪外国語学校に大陸語学研究所が設置されると、その研究員として中国語学、文学の研究に従事することになる。まもなく大阪外国語学校助教授に就任する。先生は中国語の授業で急就篇やそれに類する会話テキストをぜんぜん使わなかった。しかし言語理論に基づいた中国語教育をめざすといってみても、どんなテキストで、どう教えるのか、暗中模索である。外国語教育とはなにか、あらためて自らに問い直さねばならなかった。イエスペルセンの“*How to Teach a Foreign Language*”や巴金の当時の日本の中国語学者批判はいろんなことを教えてくれたが、それにこたえる具体的手段は当時の日本にはなかった。

「戦争の泥沼化が深まれば深まるほど学問に浸りたくなるという奇妙な心理状態でした。…高畑彦次郎博士のもとでカールグレンの“中国音韻学研究”を読みました。また少し後になるが、石浜純太郎先生のもとで大阪言語学会のメンバーの方々とイエスペルセンの“*The Philosophy of Grammar*”を読み、たいへんに啓発されました。…言語構造の基本原理に立脚して中国語を分析しなければならないことを痛感しました。」

研究会ではこの他イエスペルセンの新しい品詞論three ranksやBloomfieldの“*Language*”などがとりあげられている。構造主義言語学が大きなテーマである。これは戦後の中国語教育、研究における先生の活躍に有力な手段を提供する格好の修練の場であったと思われる。研究所の寿命は空襲の激化でわずか2年半で終わる。しかしこの間先生のかかわった仕事はその後の日本の中国語教育に大きな意味をもつものである。黎錦熙著「国語文法」の翻訳と出版。黎錦熙著「比較文法」の倉石・伊地智共訳。趙元任著「*Mandarin Primer*」の翻訳。

John De Francis著「Beginning Chinese」の翻訳（前半部）。これらは中国語の言語科学的研究の日本における先駆けであった。この研究所では同時に「支那及支那語」という雑誌をだしていたが、これについて、安藤彦太郎教授が後に次のように評している。

「ここには、戦時下でありながら、私のいう支那語派と漢文新派の協力による、新しい中国語学の方角への模索がみられることに、私たちは注目しなければならない。」

これは伊地智先生を含むグループの仕事が旧来の実務的中国語教育と戦後の理論的中国語学研究とのあいだに橋をかけるものであったことを評価したものと解される。

地 域 研 究

1949年新制大学が発足すると同時に伊地智先生は大阪外国語大学助教授に就任する。このころから先生の中国に対する関心は次第に中国の地域学的研究というかたちをとる。先生は「日本の敗戦はわたしのようなものにとっても大きな影響があった」と述懐するが、「敗戦後日本に進駐してきた米人将校の日本語があまりに上手なのでどういう言語教育をうけてきたのか気になった」ことなどを動機として、言語教育というものの先生の心のうちにおける位置づけがかわったのである。「当時米軍より寄贈された書物の中に外国語教育に関するどっしりとした本が何十冊もあり」それらを読むうちに、言語教育とはなにか、その学問的な価値を先生は改めて認識したのである。

「おれはまだ一介の語学教師になるため本をよんでいるんじゃないぞと多少の反発を心のかたすみに感じながらも、敗戦を契機として、中国語のベスト・ティーチャーになるんだという気持ちがしだいにわいてきた。」

先生は地域研究の洗礼を受けたのである。語学教師はもはや「一介」ではなくなった。「ベスト・ティーチャー」に生涯をかけることになる。

「今橋筋にあったアメリカ文化センターにはよくかよいました。当時中国からの資料はほとんど来なかったこともあって、この図書館でいろいろの知識を仕入れました。『Books

Abroad”という雑誌があって、そのなかから地域研究関係の論文を読みました。これはわたしが天津で1年10カ月接近した中国の文明の原理を考えなおすよい機会でした。」

第2次大戦後日本に紹介された新興のArea Studyは、伊地智先生にとって現代中国を捕捉するための新しい手段となった。周知のように、地域研究は第二次大戦中、連合国とりわけアメリカの大学で臨時的に開設された地域別の総合講座が発展したものである。既存の学問の枠組みをはなれ、人類学者、社会学者、言語学者、歴史学者などが協力してアジア、東欧など非西欧文化圏の体系的解明をめざすものであった。西欧で発達した学問ではとらえきれない対象にいかにか的的分析をほどこすか、その方法は新鮮であった。なによりもこの学問は外国語を重視した。現代を重視した。したがって対象地域の現代語の学習と研究に大きな席をあたえた。地域研究にとって外国語、外国語教育はもはや学問の手段ではない。地域文化研究の対象そのものとしての外国語であり、地域文化を読み解く重要な領域としての外国語であった。現代中国のトータルな理解を思い描く先生にとってこれはうってつけの学問であったといってよい。これまで白話詩について論文を書いたり翻訳をしていた先生はこれ以後詩や文学について書くことはなくなった。先生の学問の形成である。

新制大学にできた教養部はこのような新しい学問を背景としている。すでに東大に移っていた倉石博士は、アメリカにおける中国語教育と中国の地域学的研究の現状をできるだけ具体的に調べるよう伊地智先生に求めた。先生は200枚におよぶ原稿にまとめて報告したが、これは後に東大教養部の構想にかかわるものであったといわれている。先生のこのときの調査の一部が「中国語雑誌」に「アメリカの中国語学」として4回にわたって連載されている。ASTP(Army Specialized Training Program)と呼ばれる戦中の米陸軍の特殊な語学教育法も先生に新しい刺激を与えるものであった。文化人類学者と言語学者が協力して、学習者の母語と学習外国語との言語構造上の差異を十分配慮した教材をつくる。そのうえで少人数の、効率的な、集中的外国語教育を、インフォーマントをフルに活用してすすめるなどということとはそれまでの日本の語学教育では思い描くことすらなかった。語学観が根底からちがうの

である。先生の「おれは中国語のベスト・ティーチャーに」という意気込みも理解できようというものである。

「わたしが地域学関係の論文で最初に読めと教えられたのは、ライシャワー、フェアバンク両教授の“地域学における極東の理解”であった。そのなかでかれらは、中国が徐々に方法論のなかに導入されつつある一方、方法論が中国に導入されていくやりかたを結論部のべていたのを今もおぼえている。かれらは中国学というものが言語学や社会学を導入することによって新しく発展する必要のあることはいうまでもないが、教育の方法としては最初から専門を分化させることが危険であることを強調していた。ひとつにはアメリカ人が親しみのない言語の学習に莫大な時間と精力をつぎこまねばならないこと、ふたつには、自己の属する文明ではすでに常識となっている評価の方式や基本原理が伝統や文化を異にする世界ではまず専門化に先立って獲得されねばならないという主張である。これがかれらの出発点であった。」

地域学というものが従来の学問とはことなる学問の原理でたてられたものだという認識である。そのいわば横割りの学問をつらぬくのは言葉であり、それにささえられて既存の学問も新しい意味をもつのだという主張は、先生がこれまで漠と感じていたものを鮮明に形にした。後に先生はフルブライト交換教授としてカンザス州立大学におもむき、アメリカの中国語教育、地域研究をつぶさに経験するが、地域研究のなかで外国語教育のはたす役割をあらためて確認することになる。

「アメリカの大学を見てまず驚いたのは、地域言語の教育のきびしさとその能率のたかさであった。エール大学極東語研究所の授業風景はまことに猛烈であった。大クラスにおけるアメリカ人教授の理解授業、小クラスにおける中国人担当のドリル授業、学生には毎週アクチュアルプランという時間割がわたされている。…それはまるでボーイングの飛行機を飛ばすときのマニュアルと同じだと教員は笑っていた。」

伊地智先生はすぐれた中国語教育者であり、その後テキストや解説を書くことに、人並み

以上に情熱をかたむけたが、そのメンタリティーはこの地域研究との邂逅のなかではぐくまれたものである。「中国語表現文型」「中国語入門」「総合中国語入門」「東方中国語講座」「簡明基礎中国語」など、いずれもすぐれたテキストである。「中国語入門」は長く外国語大学の中国語初級教育で使われたが、使用語数、出現の順序、文型とその練習問題などに、先生のアメリカ仕込みの配慮がなされている。またしばしば指摘されるところだが、先生のテキストには随所に先生の日中友好の思いが埋め込まれている。それも自然な形であらわれる。

1965年「中国語入門」の中級篇として書かれた「東京—北京」はその一例だが、登場する主人公2人が、時代に先駆けてあこがれの北京に留学し日中友好の実をあげるという内容である。「東方中国語講座」の8課は課文の標題が「我們學習中文是為了日中友好」（われわれが中国語を学ぶのは日中友好のためだ）である。

中国語学

昭和30年の秋、中国語学研究会（日本中国語学会）の第6回全国大会が大阪市立大学で開かれた。この第1日目の総合討論は文法論がテーマで、伊地智先生と当時東京大学助教授であった藤堂明保先生が担当した。この席で先生は「中国語法のアウトライン」と題して中国語の文法についてすこしまとまった考えを発表する。少壮中国語学者として先生が輝いていた時期である。

言語とはなにか、具体的な発話からはじまって、言語形式について構造主義的な検討をすすめる。また中国語は漢字で読み書きする単音節語であるからややもすれば言語単位と漢字が混同されるが、その整理からはじまる。構造主義言語学がいうbound form, free formの区分が中国語にとっても重要なことはすでに先生は「中国語の言語単位」で表明していた。その検討の上に立って、中国語の統語論的特徴と考えられる現象文や判断文の分析をすすめるのである。現象文については未展開文の一種として理解する見解を示した。全体に機能主義的分析でつらぬかれていて、中国語のもつ特徴が機能主義的言語観のなかでいかにあつかわ

れるべきかを具体的に示すものであった。これは旧来の中国語教育の現場でおこなわれていた解釈文法を構造主義言語学に裏打ちされた科学的文法におきかえる作業のさきがけであり、また中国語の文法論が今後いかにあるべきか、その展開の方向を具体的に提起するものであった。先生は文法が言葉の整理の学ではないとことを主張している。その後60年代、70年代になると中国本国における文法研究は次第に機能主義に移っていく。先生の論文（この提起は「中国語学」誌に発表される）はいちはやくそのあるべき粗像を示したものであった。またこれは先生自身にとっても文法研究の基礎、先生の学問の基底をなすものであったと思われる。「副詞の分類原理について」は今も人々に引用される論文だが、副詞を文中に出現する位置関係の差でさらにいくつかの下位分類し、それがそれぞれに異なる機能的意味を担っていることを立証している。語の機能差をより精細に追求したものである。「虚詞の話」は昭和36年4月から1年余にわたって雑誌「中国語」に連載されたものだが、これはこのような先生の文法観を初学者にわかりやすく解説したものであった。

語彙論ないし辞典学は先生の辞書編纂作業のもとになるもので、先生は多くの時間を費やしている。これまでかかわった辞書も「井上中国語新辞典」「簡約中国語辞典」「岩波中国語辞典」など多種におよぶ。先生ははやくから西洋人特に宣教師の手になる中英辞典に興味をおぼえ、Nicolas Trigault の「西儒耳目資」以来R.MorrisonやW.H.Medhurst、A.Lobscheidの辞典を経て1940年代の趙元任・楊連昇の"Concise Dictionary of Spoken Chinese"にいたる歴史をくわしく調べている。それぞれの特徴を検討し、中国人編纂になるその後の漢英辞典、英漢辞典などとのちがいにふれる。編者の言語意識でなにが関心事になるか、品詞論やその記述のありかたをとおして文化を語っている。この時代の先駆的な仕事であった。

「動作動詞の意味記述について」は意味論の論文だが、これも辞書における意味記述に対する関心から書かれたものである。従来、近似の訳語であいまいに説明してきた類似する動作動詞を、強度、方向、テンポ、形式等6種の素性の差によって説明を試みたものである。中国語では日本語に比してはるかに動作動詞が多いが、それらが単一の語として成立している

根拠を示し、中国語の意味記述ありかたを動作動詞を例として具体化してみせたものである。

先生の中国語研究でいまひとつの大きな関心は、中国における共通語の成立と文字改革にある。「国語統一と文字改革」「魯迅と語文運動」「文化の大衆化と語文運動」「中国語の近代化」などの論文は、方言分岐のはげしい中国でいかに民族共通語が成立するか、漢字が大衆教育にどんな足かせになったか、それを克服するためにどんな努力がはらわれたか、人々に漢字を教えるためどんな教育がおこなわれたか、これらの問題を詳細に論じている。先生の論文はこれらを単に言葉の問題としてではなく、それぞれの時代の社会改革運動との関連で活写するのである。中国の語文運動の特徴をたくみにとらえて、先生のトータルな中国理解が躍如としているところである。

先生は学会活動として、1982年より2年間日本中国語学会理事長として学会の運営にあたるが、海外においてもこの時期活躍している。北京大学、中国社会科学院、香港大学等で日本の中国語教育、中国文化の受容、広くは日本の外国語教育のありかたについて講演し、海外の学者とその特性を論じ合っている。これらは後にまとめて中国の「国外語学」誌や香港大学の「中国語文研究」などに発表されている。

大 学 行 政

伊地智先生は大阪外国語大学の大学行政に大きな足跡をのこした。学長として1977年3月から2期にわたり、大学の多難な時期の運営にあたっている。

大阪外国語大学は1964年狭隘な大阪市内の上本町学舎から郊外に適地をもとめて移転することをきめる。しかし折からの土地ブームで用地の取得に難航し実現のめどがついたのは1975年である。そして箕面市栗生間谷に新学舎建設工事が本格化するのはさらに2年後、1977年春からであった。先生はちょうどこの時期に学長に就任する。建設工事はもとより、先生は予想外の難問に常時むきあわねばならなかった。大学が市内から遠い郊外に移るため通勤・通学の交通手段をいかに確保するかというのもそのひとつであった。先生

はみずから先頭に立って、阪急電鉄や阪急バスと粘り強い交渉をしたが、ようやくバスの新路線が実現するのは新学舎での開学直前であった。ちょうどその頃夜間学部学生が大阪地裁に「受教育地確認」の仮処分を申請した。昼間職をもって夜学ぶ学生は大学が遠い郊外に移ると通学が困難になる。大学側がその一方的都合によって移転するのは学生が「ひとしく教育を受ける権利を阻害する」と主張したのである。裁判ではこの主張は認められず、申請却下になるが、大学が遠い郊外に移転したことにとまっておこる象徴的なできごとであった。1979年9月大学は移転を無事完了し、新学舎での授業をはじめが、平穏な授業が定着するまで先生の苦労は絶えなかった。

大阪外国語大学の平穏な授業のために先生がはらった苦労はこれにとどまらない。先生は1967年から70年、1974年から76年、2期にわたって学生部長（現在の副学長）をつとめている。その前期は学園紛争のさなかの学生部長であった。1969年1月20日夜、上本町の学舎は反代々木派の学生によって封鎖される。後に「ボクはライターのあかりをたよりに皆さんの自宅に電話したんですよ」と先生は語るが、夜半に教職員を集め、対策を協議し、それを実践していく先頭に立たねばならなかった。春から夏へ、夏から秋へ、学園紛争はその年の暮れまでつづいた。学外での授業、機動隊の導入、荒廃した学舎の整備、その後の大学改革案の作成、そのいずれをとっても今では想像もつかない緊張と労力、忍耐力を必要とする仕事であった。人々の意見は厳しく対立した。それを集約し、実践に移すのは先生の役目であった。先生は研究生活はもとより、私生活もなげうってこれにあたったのである。そしてこれがおわると、大学移転の仕事の補佐役をつとめることになる。

1981年、先生は学長任期満了とともに、学生として、先生として、行政の長として、1936年以来45年の人生の哀楽を共にした大阪外国語大学を去った。そして関西大学教授を経て、その後新設の流通科学大学に副学長として迎えられ、新しい理念の大学づくりに豊富な大学行政の経験と手腕を発揮することになる。大学行政は、先生の思いはともあれ、先生の得意な分野であったと言ふべきかも知れない。

日 中 友 好 の た め

日中友好は伊地智先生の生涯の信条であるが、先生は主として中国語教育をとおして大きな成果をあげた。大学における教育はいうまでもないが、広く市民にむけた中国語教育においても同様である。大阪中国語学院は大阪府日中友好協会の友好運動の一環として1972年以来開かれている中国語講座である。先生は1980年からこの学院長に就任し、一般市民の中国理解を助けることをめざして中国語講座の運営にあたっている。学院の規模は次第に拡大し、すでに入門から高度な通訳クラスまで、24クラス230余名が常時熱心に学習する日本有数の中国語講座にそだっている。これにともなって、人々の関心を言葉の学習だけにおわらせないために「日中文化フォーラム」を企画し、日中友好協会主催で市民向けの中国文化講座を開いている。ほぼ月に1回各分野の専門家を招いて主として現代中国を紹介している。ときには先生がみずから講師となって日中友好交流と中国語の関係を熱く語るのである。

日中教育交流懇話会は1978年鄧小平副総理とともに来日した廖承志中日友好協会会長の提案で関西の教育関係者がつくった友好組織である。先生はその創設に深くかかり、副会長、会長をつとめている。毎年20名前後の教育関係者が相互に往来し、入試や教員養成、障害者教育など共通にもつ個別の問題ごとに実地に見学し意見をかわしている。

日本の中国語教育は主として大学でおこなわれているが、教育の国際化にともなって高等学校でこれを試みるところが増加している。1985年、先生はこの流れをたすけるため、日本高等学校中国語研究会を創設した。高等学校における教育内容の向上と教員の経験交流の場を提供しようというのである。先生はその会長として今も高等学校の中国語教育の牽引役である。また、1990年に先生はビジネス中国語学会を創設した。近時の中国語研究が理論的研究に重点が移り、大学卒業生の中国語実践能力の向上にかならずしも結びついていない状況を憂慮したのである。大学の研究者のみならず、ひろく社会で中国貿易にたずさわ

る人々を集め、実用中国文の教育の重要性をとき、その推進のための条件づくりをした。またその事業の一環としてビジネス中国語検定制度をつくり大学生のこの面での中国語能力の向上をはかっている。

中国政府教育部は2000年、世界各地で中国語教育に貢献した人をたたえるため中国語文化友誼賞を創設したが、その第一回受賞者に日本では伊地智先生を選んだ。受賞理由のひとつは「漢文教育の伝統が長い日本で外国語としての中国語教育に新しい道をひらいたこと」である。すでにみたように戦中戦後にかけて先生はその道のさきがけとして活躍してきた。そしてつねにそのむこうにあったのは日中友好である。まことに先生の活躍は中国語文化友誼賞にふさわしいといわねばならない。

先生のことばをかりると、「好奇心の奥にひそむのはつねにChinese Puzzle を解くことです」という。伊地智中国学が先生の幅広い友好活動をとおして多くの日本人の中国理解にユニークな助けになることを期待していたやさき、われわれは先生の訃報に接することになった。2001年4月13日午前11時、先生は82年の生涯を閉じられた。

謹んでご冥福を祈りたい。

(大河内 康憲)

注：本稿はもと上海国際友人研究会、大阪編集協力委員会共同編集「日中友好に貢献した人びと」（日経事業出版社、2001年3月刊）の伊地智善継先生の項のために書いたもので、それに多少手を加えた。文中の「」内は煩を避けいちいち注記しないが、昨年暮れ筆者が伊地智先生と3回面談して得た先生のことば、およびつぎの刊行物からの引用である。

1) 伊地智善継：わたしと中国語教科書（「中国語学」104号） 2) 倉石武四郎「中国語五十年」（岩波新書） 3) 安藤彦太郎「中国語と近代日本」（岩波新書） 4) 「大阪外国語大学70年史」（同大学刊）

日本ビジネス中国語学会

設立趣意書

明治以来終戦時に至るまでの間、わが国の外国語教育は、先進文化を吸収するための文化語学と、近隣諸国との軍事・通商に備えるための実用語学にはっきりと分れていました。従って文化語学はアカデミックな研究であり、実用語学は技術的訓練にしかすぎないと見られてきました。そういう潮流の中で、中国語学界のエリートたちは、中国語学を文化語学としてアカデミックな研究の対象にしようと、第2次大戦末期に力説されるようになりました。

第2次大戦後は、曲がりなりにも中国語学はアカデミズムの片隅にその位置を見つけ、大学の教員もアカデミックな研究によつて自分の業績を作るようになりました。しかし、一方で実用語学としての中国語学は軽視されるに到りました。外国語大学や社会科学系学部でも、商業経済や新聞雑誌に関する中国語研究は次第におろそかになり、そのため、この方面の研究に従事する人々は、共同に研究する基盤もなく業績を発表する媒体もないという有様であります。

言うまでもなく、日本のおかれている国際的地位は明治・大正と大いに異り、外国文化に関する見方も先進・落後という単純な区別はなくなり、わが国と中国との関係もまた文化から経済まで広くかつ深いものになっています。中国語の言語理論的研究はもちろんより一層発展させる必要があります。同時に中国語の実用的研究はそれ以上必要であると思われる。

近畿在住の数人の研究者が時折顔を会わせて論議しているうちに、全国各地に散在しているそしてまた学界のみならず経済界で活躍しているこの方面の研究者を結集して、中国語の実用的研究——例えばビジネス中国語・通訳翻訳の研究等々を組織的、体系的に推進するために、ここに「日本ビジネス中国語学会」をつくろう、という議が持ちあがりました。

趣旨に賛同下さる方々のご参加を心から期待しています。

日本ビジネス中国語学会会則

第1条（名 称）

本会は日本ビジネス中国語学会と称する。

第2条（事務所）

本会は事務所を大阪市内に置く。

第3条（目 的）

本会はビジネス中国語に関する研究及び関係諸団体との交流を通じて、我が国における中国語学習者の語学能力の向上を図り、もって日本と中国の友好交流の発展に寄与することを目的とする。

第4条（事 業）

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. ビジネス中国語、翻訳・通訳に関する研究。
2. 日中間の相互理解を深める為の教育・研修事業。
3. セミナー、講演会の開催。
4. 機関紙の発行。
5. ビジネス中国語検定。
6. その他前各号に関連する事業。

第5条（会 員）

本会の会員は次の通りとする。

- 個人会員 本会の目的に賛同して入会した個人。
法人会員 本会の目的に賛同して入会した法人。

第6条（入 会）

本会の会員になろうとする者は、別に定める入会申込書を提出し、承認を得なければならない。

第7条（退 会）

- ①本会を退会しようとする時は、理由を付した退会届けを提出しなければならない。
- ②会員は次の各号の一に該当するときは、退会したものとみなす。
 1. 会費を2年以上滞納したとき。
 2. 死亡したとき。
 3. 会員たる法人が解散したとき。

第8条（除 名）

会員が本会の名誉を傷つけ、又はこの会則に違反したときは、総会の決議により、除名することができる。

第9条（役 員）

- ①本会に次の役員を置く。

会 長	1 名	理事長	1 名	理 事	10名以上15名以内	会計監事	2 名
-----	-----	-----	-----	-----	------------	------	-----
- ②理事及び会計監事は、会員の中から総会において選任する。
- ③会長及び理事長は、理事の互選とする。
- ④法人会員の代表は役員の被選任資格を有する。

第10条（役員の職務）

- ①会長は、本会を代表し、会務を統括する。
- ②理事長は、会長を補佐し、会務を処理する。会長に事故あるときは、その職務を代行する。
- ③理事は、理事会を組織し、会務を執行する。
- ④会計監事は、経理を監査する。

第11条（役員の任期）

- ①役員の任期は、2年とする。但し再任を妨げない。
- ②補欠により就任した役員の任期は、前任者の残存期間とする。

第12条（役員の報酬）

- ①役員は、原則として、無給とする。但し、常任の役員は、有給とすることができる。
- ②常勤の役員の報酬は、理事会の決議により定める。

第13条（顧 問）

- ①本会に顧問、相談役若干名を置くことができる。
- ②顧問、相談役等は理事会の議決を得てこれを委嘱する。

第14条（総 会）

- ①総会は 定時総会及び臨時総会とする。
- ②総会は会員をもって構成し、この会則に規定するもののほか、次の事項を決議する。
 1. 事業計画及び収支予算。
 2. 事業報告及び収支決算。
 3. その他本会の運営に関する重要事項。

第15条（総会の召集）

- ①総会は会長が召集する。
- ②総会を召集するには、会議の議題並びに日時・場所を開催日の10日以前に通知しなければならない。

第16条（総会の開催）

- ①定時総会は、毎年1回会計年度終了後3ヶ月以内に開催する。
- ②臨時総会は、理事会が必要と認めたとき、又は会員の5分の1以上の請求があったときに開催する。
- ③総会の議長は、会長がこれにあたる。

第17条（総会の議事）

- ①会員はそれぞれの一個の議決権を有する。
- ②会員は他の会員に代理出席を委任することができる。
- ③総会の決議は、出席会員の過半数をもって行う。

第18条（理事会）

理事会は、理事をもって構成し、この会則に定められるべきもののほか、次の事項を処理する。

1. 総会における決議事項の執行。
2. 総会に付議すべき事項。
3. 資産の管理。

第19条（理事会の召集）

- ①理事会は年1回以上開催し、会長が召集する。
- ②議長は会長がこれに当たる。

第20条（理事会の決議）

- ①理事会の決議は出席理事の過半数をもって行う。
- ②理事は他の理事に代理出席を委任することができる。

第21条（資金）

本会は下記の資金により運営する。

1. 会員並びに寄付金。
2. 事業収入及びその他の収入。

第22条（会計年度）

本会は会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第23条（事務局）

- ①本会の事務を処理するために、事務局を置く。
- ②事務局は、理事長が統括する。
- ③事務局に常勤する職員は有給とすることができる。

第24条（会則の変更）

会則の変更は会員の3分の2以上の承認を要するものとする。

付則

1. 本会は1990年12月8日から発足する。
2. 本会の最初の役員は設立発起人がこれにあたる。

役員名簿

（任期2002年の総会まで）

役員	氏名	所属先
会長	藤本 恒	日中経済協会関西本部
理事長	武吉 次郎	摂南大学
会計監査	待場 裕子	流通科学大学
理事	安念 一郎	亜細亜大学
理事	伊井 健一郎	姫路獨協大学
理事	今里 禎	天理大学
理事	大河内 康憲	大阪外国語大学
理事	上林 紀子	京都外国語大学
理事	釜屋 修	駒沢大学
理事	與水 優	
理事	塚本 慶一	神田外語大学
理事	戸毛 敏美	関西外国語大学
理事	神崎 多實子	サイマルアカデミー
理事	橋本 南都子	東海大学
事務局長	岩下 孝彦	大阪中国語学院

日本ビジネス中国語学会

入会のご案内

趣旨に賛同される方はどなたでも入会出来ます。

入会ご希望の方は申込み用紙に会費を添えて、事務局までお申し込み下さい。

(設立趣旨・20頁、会則・21頁をご参照下さい)

入会費 1,000 円 (個人)

会費 3,000 円 (個人)

10,000 円 (法人)

20,000 円 (法人)

会費納付先 郵便為替 00950-9-4857 日本ビジネス中国語学会

連絡先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2-北2-26 マルサンビル4F

日中語学センター気付 日本ビジネス中国語学会

電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664

キ リ ト リ セ ン

入会申込書

日本ビジネス中国語学会

会長 藤本 恒 殿

貴会に入会致します

年 月 日

ふり 氏 名		女 男	生年 月 日	年 月 日
ふり 住 所	〒			
電 話	— — — — —			
所 属				

会報 第11号 2001.10.5発行

日本ビジネス中国語学会

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北2番26号 マルサンビル4F

日中語学センター気付

電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664